論文要旨

渡邉庸平

本稿は、視ることに関する現代的なアートのコンテキストについて論じたものである。ここでは筆者が自身の作品と歴史上の芸術作品を参照し比較ながらアプローチすることが試みられている。本稿は大別して、五章立てで展開される本論と筆者の芸術作品を通した考察から構成される。

以下に各章の内容を要約する。

序章では本稿の研究主題である「視ることの切り分け」を検討しようと思った動機と、筆者の制作の発端や実感について述べていく。

第一章ではフォーマリズムの諸論考を参照することによって筆者の作品を分析していく。美術批評家のマイケル・フリードが、1967年に『アートフォーラム』誌上に発表した論文「芸術と客体性」のシンタックス、グレアム・ハーマンの「関係性のない芸術」を順を追って検討していくことによって、新しい演劇性を志向するための、芸術における客体性について述べていく。

第二章では主体となる筆者や鑑賞者の視点と、それと相対的な位置にある存在としてのマクロ的な視点を仮想し、その両者の相関関係を思考することによって世界の認識をすることが筆者の作品論として述べられる。「対象（object）」を認識する際に、目線の高さや対象物との距離という自身との物理的な位置関係からだけではなく、身体というスケールの拘束によってその認識の性質は大きく異なっている。主体：「自身の視点」に対して、仮想的な客体：「巨人の視点」とはいかなるものなのか。そこからは、客体が得るパースペクティブについて。私の身体、鑑賞者に触れながら述べてゆく。ここでは筆者が2019年に制作した「Giant Chorus」を参照し自作の解説と分析を試みる。ここでは主に、ミシェル・セールによるイクノグラフィを参照しながら、視ることについて思考してゆく。

第三章では近作の写真を中心とした作品や製本についての作品群を分析していく。第二章で述べられた主体の設定から一度離れ、写真そのものの構造として「視る」ことについて考察していきたい。色彩の状態、写真の状態、それら関係を俯瞰的に状態の経験として受け入れる方法を検討する。

第四章では自作における具体的な構造のマトリクスをダイアグラムをつかって分析していく。自作で繰り返し用いられる手つきを、　と対応させながら検討してゆく。そこから得られた見取り図を介して、思考が形態に変化することへ向けられた視点自体に注目して論じられる。

終章では、本研究で一貫して語られた、制作そのものの「視る」ことと生成された作品を「視る」こと、そして作品そのものの主題としての「視る」ことが複雑に入り組みあった状態を整理し今後の展望を示していきたい。